

第3節 『不登校児と呼ばれて』（教材1-3）

大町北高校 黒岩麻美

【その1】

今、私は高校生として普通の生活を送っている。普通というのは、集団生活の中で生きていくことだと、私は考える。私は、ずっと普通ということにあこがれていた。

中学時代、私は学校に行っていなかった。行けなかったのか、行かなかったのか、それは私の心だけが知っていて、中学を卒業した今、行っていなかったという事実だけが残っている。

あの時は、自分を不登校児だと認めることができなかった。『みんなと違うんだ』という自分を自分で理解するには、あまりにも勇気がいった。欠席の数は、不登校児ということを示していたが、不登校児と呼ばれることが耐えられなかった。

中間教室というところがある。学校に行っていない生徒が通い、そこへ行くと学校に出席したことになるのだ。勉強を強制させられる場所ではないらしい。親にすすめられたことがあった。「出席日数がかせげるから」と言われた。「毎日家の中にいるから、たまには外の空気を吸ってみるのもいいじゃない」と。それに、「軽い気持ちで行ってみたら」と。しかし、私は行かなかった。出席日数だけただ増えても、私の中で何かが変わるとは思えなかったし、からっぽの日数ばかり重ねても無意味のことだと思ったから。苦しいのに、日数がどうのこうのと考えるのはばかりしかかった。もう一つ、そこへ通うということは、みんなと違うということを認めたことになる。それが怖かった。どこかに記されている、出席日数の数、それを恐れながらも、『中間教室に通った方が、私は普通に見えるのかな?』と、自問して悩んでいた。

【その2】

そんな時、パジャマでゴロゴロして、テレビを見ていた。ニュースで中間教室のことをやっていた。背広を着たニュースキャスターが言った。

「こういう場所が増えるということは、安易に、学校に行かなくなる子が増えるのではないのでしょうか。さて、次のニュースです。」

『そんなことないよ。学校に行くのが一番“安易”なことだよ。世間の風は冷たいんだから。あなたがそこで簡単に、「中間教室のことは、認められません」って言えばちやうくらいに』

私は、画面を見て呆然とした。そして、心の中でつぶやいていた。

『学校がすべてだという考えも、学校の中で頑張っていくということも、その人が

そう思えばそうすればいい。そう思えなければ、そうしなければいい。ダメだと思ったら、逃げればいい。逃げることはいけないことなのかな。人間の価値が下がるのかな。そしたら、私はいくらになるのかな。誰か値段をつけてみてよ』と。

逃げたくっている自分を認めること。自分の中に弱い部分があるって知ること。そのことを無視して、そこから前には進めない。強い部分ばかりではないのに、頑張ろうとはりきったら疲れてしまう。そして、自分にうんざりする。そう思うことは避けたかった。自分で自分のことを嫌いだと思ったら、本当に世の中に認められていない存在になってしまう。だから、『弱虫でいいや』と思った。そしたら、嘘みたいに気持ちが楽になった。『これが私なのよ』って、『これでいいじゃないか』と思うようになった。そして、自分のことを見つめ直して、また動き出せばいい。そこからは、自分の力で動かないといけなけれど、動き出したことがすごく自信になる。

高校に入って、1年・2年と副ルーム長をやらせてもらった。クラスのためというよりも自分が楽しむために、自分が信じることを言ってきた。そして、いつもはしゃいで楽しんできた。そんな私を、クラスの人を受け入れてくれた。クラスの中に自分の居場所が持てたことについて、クラスメートに感謝しているし、そうなれた自分を誇りに思っている。今の私の中には、あの時よりも、クラスの人を認め、分かろうとしている自分がある。認め合うことで、みんな幸せになっていくのだと思い始めてきた。

そう思うようになってきたのも、不登校児として中学生を送ってきたからかもしれない。世間の中で、自分が認められた存在でないことをいつも感じていた。認められないことを悩むばかりで、何かを、誰かを認めるなんてできなかった。認めたら負けたことになると思った。すぐ優劣をつけたがる世間の考え方に、自分が劣の方にいるのは明白だった。だから、自分からラインを引いたのかもしれない。今は、自分のこと、それなりに好きになってきている。だからラインなんてどうでもよくなった。今でも、劣の方でも、それでもいいや。ラインを引く生き方なんてもうやめる。世の中の人に、「もう、やめてよ」なんて言っても、私の声は届きそうにないけど、伝えたい気持ちがある。

『弱い自分を認めて下さい。弱い人がいることも認めて下さい』『みんなと同じことをしていた方が生き心地はいいけれど、時に枠から出てみた時に、外からしか分からない真実だってある』ということ。

私は、ずっと普通ということにあこがれていたけれど、「弱いこと、それ普通だよ」って認めてくれたクラスにいて、やっと、『ありのままの自分が普通なのだ』ということを知ることができたのだ。

(平成10年度 差別の解消を目指す作文・詩 入選作品)

【参考資料】

手記—輝ける脱線—朋子 その生きざま—

私は朋子、今、輝いて自分の道を自ら開拓している。イバラの荒野を乗り越えて。

保育所のお泊まり保育というのがあり、スイカ割りや肝試しがあった。頑張っても一生懸命やってもみんなが笑う。失敗したり驚いて泣いたりすると、そのことを引っ張り出し、いつまでも馬鹿にされる。それが分かっていたからいやだったのだ。今でもいやだ。

小学校のある日、クラスの友達はみんな名前呼び合っているのに、私一人だけが苗字で呼ばれていることに気がついた。気が付いたら変だった。どうしてなの？

中学校は校則が厳しかった。そんななかで、学業に、部活にと乗りに乗って、自分の力をフルに出し切ってきた。バレーは楽しい部活だったが、先輩後輩関係が厳しく小学校時代とは天と地の違いがあるように感じられた。秋の新人戦で、私だけレギュラーになった。うれしかった。しかしそのころ、毎回の練習の前半に設定されていた筋トレの最中、決まったように呼吸が苦しくなり、途中で休みを取らざるを得ない自分に気が付いた。祖父の喘息が私に出てきたのだと思った。でも、いざパスやアタック・レシーブなどの練習に移ると苦しさも忘れ、いくらでも頑張ることができた。バレー仲間には、私のこの様子がずる休みのように受け止められたのだろうか、壁にもたれて休んでいるとき、なんとなく友達の雰囲気がおかしいように感じられた。

生来負けず嫌いの私にとって、こんなことで打ちのめされるのは悔しかった。毎朝登校しようとする私を、何かが締め付け、呼吸を困難にさせた。今日こそはとカバンを肩に玄関まで行ってもそこから先が私を阻んだ。学校へ行きたい。苦しくてもなんとか我慢して学校へ出掛けて行った。しかし教室にすることができず、保健室で一日過ごしたことが多かった。そんな状態が1年間も続いた。毎朝、母が明るく声を掛けてくれる「モチ、おはよう」と。私の雰囲気で母はすべてを察知し、それ以上何も言わなかった。

中学2年の秋、母に、自分を苦しめる「学校」のことをもう考えないと告げた。学校へ「行かれない」から「行かない」に変わった。仲良しの友達が時々遊びに来てくれ、たくさんのことを考える時間をもった。トイレへも一人では行こうとしない友。一人で行動する人になにか偏見をもっているのではないかとみえる。どこのグループにも属さず一匹狼であった私は、きっといろいろなことを言われていたのだろうと思い、ばかばかしくも思った。八方美人でしかも目茶苦茶軽く上ずったような生きざま。彼女らの本音はどこにあるのだろう。なぜ本音で生きようとするのいだろう。なぜ人と同じでなくてはいけないのだろうか。私はなぜ学校へ行きたいのか。それなのになぜ行けないのか。なぜ学校へ行かなくてはいけないのか。なぜ生きているのか。それからそれへと考えた。

結果的に学校へ行かなくても、学ぶことが大好きだった私は勉強した。高校へ行かなく

でも学べる。でも、先に進める道はつくっておこうと思い大検を目指した。しかし、社会で生きれる人間をつくる学校、その学校でやっていけなくなった私が、果たして日本の社会でやっていけるのか。到底無理！そんな結論に達した私は、日本を捨てアメリカへ行こう、そこで生きるための英語を学ぼうと決めた。みんなが歩むレールに戻るのではなく、思い切った脱線を決意し、高校進学もあっさり断念した。母の「モチ、あんたは生きていけるよ」というこの言葉と、家族がいろいろ言わなかったこと、それが私にとって大きな支えとなった。

日本の大検も役に立たない、こんな思いから必要科目の半分ほど取った大検もそこで捨てた。日々の生活を英語づけ状態にした。テレビもラジオも読書も。凄まじかった。そして、だんだん日本を嫌いになっていった。18歳の誕生日にアメリカに渡ろう、そのための資金を稼ごう。留学機関に頼み、パスポートや向こうでの学校の手続きを進めた。学生ビザが下りないままロスに渡り、留学機関の言うビザの現地取得を待った。

しかし、私には学生ビザは下りなかった。アメリカでの大学生生活を夢見た私は、学生ビザを取得できないことにどうしても納得いかなかった。帰国後アメリカ大使館までその理由を尋ねに行った。「高卒でなければ学生ビザは下りない」……この説明は、私にとって予期せぬできごとであった。この先どうしたらいいんだろう。私の将来の夢は……。しかし、アメリカでの痛手が私を強くしていた。焦ることもない、人生はなんとかなりそうだ。自らカッターで傷つけた私の腕の傷跡が、夢を失ったはずの私にとり「生きること」を強く感じさせてくれるものとなっていた。TOEFL（アメリカ・カナダ共通の語学力テスト）とSAT（アメリカの共通一次テスト）を無事通過し、某大学から入学許可が届いた。

しかし今、私は重要なことに気づいた。これまでの私がアメリカに固執するあまり日本・日本人に対して「偏見」をもっていたことを。日本のものというだけで拒否していた私。目が覚めた思いだった。一時期を乗り越えるためにアメリカに固執することも重要な部分であったが、それでも自分が恥ずかしくなった。アメリカ人のAETが贈ってくれた言葉“Where there's a will, there's a way.”と“*No man is an island.* は私を支える大切な言葉になった。このAETの存在と、ある日本人の友達が、「日本人に私を理解できる訳はない」という私の強い偏見と決めつけを打ち破ってくれる大きな力になったのだ。

「一度自分を確立してしまえば、どんな場所で生きようと、自分を失うことはあり得ない」……今はこんな気持ちで、社会の常識に合わせようとするのではなく、あえて自分にあった生き方を求めながら、日本の一社会人として自分を見つめながら生きている。

AETに“*Not only a strange Japanese but a unique person.*”と受け止められている私、“*Man won't understand you. Few can or ever will.*”とも……。

これが私なのだ。これを背負って未来に向かっていく。

不登校にさせた魔物、それは極度の精神的ストレスであったという謎も解け……。

『不登校児と呼ばれて』について

ねらい

- 1 「普通ってどういうことか」を考え合うことを通して、『皆なそれぞれに違っていい』『違うということが普通である』ということの意味を学び合う。
- 2 ありのままの自分を認めること、ありのままの他人を認め合うことが仲間づくりの基本であり、みんなの幸せにつながることを、学び合う。
- 3 お互いの人格を尊重し合い、学校生活を充実したものにするために、「権利と責任」の関係についても話し合いを深め、学級づくりや自主活動などでの仲間づくりのきっかけとしたい。(本書 p.17-19「ワークショップ “自分勝手” と “人権” 参照)

進め方 (例)

【導入】

「普通ってなんだろう?」「みんなの考える普通ってどんなこと?」と問いかける。

【展開】 グループ討議

1. 教材【その1】の読み合わせをする。

① T: 「この人は何を苦しんでいるのだろうか?」「この人と同じような苦しみを感じたことはないですか?」

② 各グループごと意見をまとめて発表する。

- ・みんなが普通に学校へ通っているのに、自分には行かれない
- ・自分はみんなと違う
- ・自分はだめな人間なんだ
- ・普通という呪縛から逃げたくても逃げられないでいる自分

2. 教材【その2】を読み、彼女の変容の背景などを考え合う。

① T: 「この人は、どのように考えを変えたのでしょうか? また、変容した条件や背景はなんだったのでしょうか?」

② 各グループごと意見をまとめて発表する。

3. 「手記一輝ける脱線」も合わせ読み、朋子さんの心情を自分に引きつけ考えさせる。

【まとめ】

① T: 「高校生になってから、この人やこの人のまわりの人達はどのように変わったんだろうか? また、このような友人に自分ならばどのようにかわるだろう?」

② 各グループごとまたは、各自意見をまとめて発表する。自分の考えを書く。

発展 ○構成劇風にシナリオ化し、役割分担をして、全校集会やLHRなどで問題提起する。

参考 ○『なかまとともに』(前出) P.1~P.34。